

論 文

シェリーの風刺（１）
—バラッド形式による風刺詩—Shelley's Satire (1)
—Satirical Ballads—

望 月 健 一

MOCHIZUKI Ken-ichi

１．はじめに

イギリス・ロマン派の風刺文学の傑作と言え、まずバイロン（G. G. Byron）のいくつかの長篇詩が挙げられる。また、ブレイク（William Blake）やコールリッジ（S. T. Coleridge）の一部の作品にも風刺の要素が見られる。しかし、パーシー・ビッシュ・シェリー（Percy Bysshe Shelley, 1792-1822）の風刺的な作品がまとめて取り上げられることは、これまでほとんどなかったのではないだろうか。シェリーの詩には専制君主に対する憎悪心や、他の作家、思想家に対する批判精神があらわれているものが多いが、このことは、この詩人が決して風刺とは無縁ではないことを裏付けるものである。

スティーヴン・スペンダーは、シェリーの詩を １．教訓詩、２．精神的自伝、３．純粹抒情詩、４．告白的抒情詩、５．風刺詩、の５つの部門に分類し、風刺詩の項目で『ピーター・ベル三世』（*Peter Bell the Third*）、『無秩序の仮面』（*The Mask of Anarchy*）、詩劇『暴君スウェルフット』（*Oedipus Tyrannus; or, Swellfoot the Tyrant*）を扱っている。^１ また、スティーヴン・E・ジョーンズは、スペンダーが挙げた３つの作品に初期の「人間界を歩く悪魔：バラッド」（「*The Devil's Walk: A Ballad*」）を加えている。^２

本稿では、これら４つの作品にさらに風刺的要素を含む他の３つの作品を加え、考察を加えることによって、シェリーの風刺の特質を浮き彫りにしていきたい。

２．「風刺」の語源と定義、及びシェリーの「断片：風刺を風刺する詩」

鈴木善三氏によれば、「風刺」（“satire”）の語源には二つの説がある。^３ 一つは、ギリシャ神話に出てくる半人半獣の森の神「サテュロス」（“Σάτυρος”）に由来するという説である。もう一つは、「雑物、寄せ集め、ごたませ料理など」を意味するラテン語「サテュラ」（“satura”）に由来するとする説である。そして、鈴木氏は「風刺」の正式な語源は後者であり、前者は一種の通俗語源説であるとしている。

もちづき けんいち（幼児教育学科）

『オックスフォード英語辞典』 (*The Oxford English Dictionary*) で “satire” の定義を調べると、まず、1の項目に “A poem, or in modern use sometimes a prose composition, in which prevailing vices or follies are held up to ridicule. Sometimes, less correctly, applied to a composition in verse or prose intended to ridicule a particular person or class of person, a lampoon.” (「はびこる悪や愚かさを嘲笑する詩、あるいは現代の用法では時には散文。時には、それより不正確であるが、特定の人物あるいは階級の人物を嘲笑するために作られた詩や散文。落首。」とある。

ところで、この “satire” の 2 d. *personified* の項目には、この語が擬人化して使われている例が列挙されていて、その中にシェリーの「断片：風刺を風刺する詩」(‘Fragment: Satire on Satire’) の17～19行目が引用されている：“If Satire’s [scourge] could awake the slumbering hounds / Of Conscience, or erase with deeper wounds, / The leprous scars of callous infamy;” (「もし風刺が下す懲罰が、眠れる良心の獵犬の目を／覚ますことができるならば、あるいは、より深い傷で／無感覚になった不名誉のハンセン病の傷跡を拭い去ることができるならば」)。ここで、この引用箇所にある「眠れる良心の獵犬」(“the slumbering hounds of / Conscience”) という比喩表現に注目したい。この語句はシェリーが風刺を単に「嘲笑する」(“ridicule”) だけのものではなく「良心」(“Conscience”)、即ち、善悪の観念と切っても切れない関係にあるものと捉えていたことを示している。もちろん、「断片：風刺を風刺する詩」は完成度の低い未完の作品であり、その解釈にあたっては十分に慎重を期する必要がある。しかし、このOEDに引用された詩行には明らかにシェリーの風刺観が反映されているものと判断できるのではないだろうか。この一節は、シェリーが風刺的な作品を書く場合、そこに必ず倫理やモラルの問題が絡んでくると大いに関係があるものと考えられる。

3. バラッド形式による風刺詩

シェリーの風刺詩で笑いやユーモアの要素が含まれる作品は、『暴君スウェルフット』を除けば、すべて変則的なバラッド形式で書かれている。シェリーは本質的には真面目な詩人であるが、軽妙なリズムや言葉使いで書くのに適したバラッド形式による作品に、ユーモア精神が発揮されているものが多く見られることは興味深い。

(1) 「人間界を歩く悪魔：バラッド」

「人間界を歩く悪魔：バラッド」は、1812年に書かれたシェリーの初期の習作である。この詩は通常、サウジー (Robert Southey) とコールリッジが協同執筆した風刺詩「悪魔が考えた事」(“The Devil’s Thought”) を模倣した作品とみなされているが、ここには既に、シェリーの後年の本格的で規模の大きな風刺詩の萌芽が見られる。

これは、地獄から出てきた「悪魔」が人間界を徘徊するという設定の作品であるが、人間界、即ち当時のイギリス、スペイン、そしてアイルランドの社会が風刺の対象となっ

ている。この詩の主人公「悪魔」が登場する冒頭の1～18行目を引用する。⁴

I

Once, early in the morning,
Beelzebub arose,
With care his sweet person adorning,
He put on his Sunday clothes.

II

He drew on a boot to hide his hoof,
He drew on a glove to hide his claw,
His horns were concealed by a *Bras Chapeau*,
And the Devil went forth as natty a *Beau*
As Bond-street ever saw.

III

He sate him down, in London town,
Before earth's morning ray;
With a favourite imp he began to chat,
On religion, and scandal, this and that,
Until the dawn of day.

IV

And then to St. James's Court he went,
And St. Paul's Church he took on his way;
He was mighty thick with every Saint,
Though they were formal and he was gay.

<試訳>

I

ある日、朝早く
ベルゼブルは目を覚まし、
いとしい人が着飾るのを懸命に手伝い
自分は礼拝用の晴れ着を着た。

II

裂けた蹄を隠すブーツをはき

かぎ爪を隠す手袋をはめ、
真鍮の帽子で角を隠し、
悪魔は、これまでにボンド街を歩いた
誰よりも粋で洒落た格好で歩いて行った。

III

朝日が射す前に
ベルゼブルはロンドンの町中で腰を下ろした。
夜が明けるまで親しい小鬼と
宗教、スキャンダル、あれやこれやについて
おしゃべりをした。

IV

それからセント・ジェイムズ・コートへ行き、
セント・ポール教会へ行った。
聖職者達の中であってベルゼブルは体が大きくずんぐりしていて、
正装した聖職者達の中で、彼のみが派手に着飾っていた。

人間界に登場する「悪魔」は、足のひづめ、手のかぎつめ、角を隠して、めかし込んでいる。変装は「悪魔」の偽善性を表す。また、太っていることは悪の象徴である。

以下、この引用箇所後の粗筋を要約する。主人公「悪魔」は、酪農を営んでいる。家畜どもは人間の流血のニュースや死に行く者のうめき声（人間の血と悲しみ）を飲み食いして丸々太っている（第10連）。王子も太っている。（当時は、ジョージ三世が精神異常のため、皇太子が摂政をつとめていた。この皇太子が後のジョージ四世である。）王子は謁見の儀で緊張しているが、派手なチョッキを着ていて、その分厚い尻の肉を背景に宮廷のパンタルーンは半月のようである。王子は、頭も心も空っぽである（第14～16連）。この部分は、同一人物をモデルにした詩劇『暴君スウェルフット』冒頭に登場するスウェルフット（この作品が書かれる時点では、ジョージ四世）の身体的特徴の描写を思わせる。その他、悪しき搾取により太っているのは、政治家、法律家（そのガウンとかつらは地獄の金でまかなわれている）、ヨーマン（彼らが利益を計算して口ずさむ歌は、地獄の歌）、そして司教である。最後は「地獄の王」の帰還で、鬼どもは飲めや歌えの大騒ぎとなる。最後に、この詩に出てくる「悪魔」や地獄は、後年の『ピーター・ベル三世』を先取りしていることを付け加えておきたい。

（2）『ピーター・ベル三世』

シェリーの本格的な風刺詩は、スペンダーが挙げた『ピーター・ベル三世』、『無秩

序の仮面』、『暴君スウェルフット』の3つであり、いずれも1819～1820年の作品である。シェリーは基本的にはシリアスな作家であり、彼の場合、同時代の他の詩人の風刺詩から刺激を受けて笑いの要素を含んだ風刺詩を書いたと考えられる。

シェリーの『ピーター・ベル三世』は、その「献辞」、「プロローグ」によれば、ワーズワスの『ピーター・ベル』(Peter Bell)のパロディーとして1819年に書かれたものである。ワーズワスのものより先に出版されたレノルズ(J. H. Reynolds)の『ピーター・ベル：リリカル・バラッド』(Peter Bell. A Lyrical Ballad.)と、『エグザミナー』紙に載った両作品の批評を読んだことが直接の創作の動機とされる。

しかし、シェリーがパロディーという彼にしては珍しいジャンルを手がけたことの背景には、1816年以降、風刺詩人バイロンとの交流を深めており、その作品から感化を受けた可能性が大きいと考えられる。シェリーがバイロンと自分の対話をモデルにして書いたとされる『ジュリアンとマッダーロ』(Julian and Maddalo)の創作年代は、1818年秋から1819年春にかけてである。もし、バイロンとの交流がなければ、シェリーは『ピーター・ベル三世』のような大規模な風刺詩を書くことができたかどうか、甚だ疑問である。また、グレイミー・ストーンズ・他編『ロマン派時代のパロディー』に見られるように、イギリス・ロマン派の時代はパロディーの全盛期でもあったという事実も見逃すことはできない。⁵ さらには、『ピーター・ベル三世』を書いた1819年頃のシェリーは数多くのギリシャ・ローマの古典文学作品を読んでいることから、ユウェナーリス、アリストファネスなどの風刺詩からの影響も考えられる。

さて、シェリーの『ピーター・ベル三世』の風刺の対象は、ワーズワスである。しかし、ここには当時のイギリス社会全体が戯画化されている。その中には宗教、国王、批評家等も含まれており、プロローグを含め全812行から成る、大変大きな広がりを持つ作品となっている。

この詩は、ワーズワスの『ピーター・ベル』という一つの作品のパロディーではない。しかし、これら二つの作品ではストーリーの展開のベクトルの方向が正反対であることは興味深い。ワーズワスの『ピーター・ベル』は、道徳性の低い主人公が回心を経験することにより徳の高い人物に生まれ変わる、換言すれば、地獄行きと思われる人物が救済される物語である。これに対して、シェリーの『ピーター・ベル三世』は、主人公のピーターが地獄行きになる物語である。しかも、「死」(“Death”)⇒「悪魔」(“The Devil”)⇒「地獄」(“Hell”)⇒「罪」(“Sin”)⇒「恩寵」(“Grace”)⇒「永罰」(“Damnation”)⇒「二重の永罰」(“Double Damnation”)と、パートが進むにつれて主人公が段階的に下へ下へと、どこまでも堕ちていくように作品全体が設計されている。

詩形は、a b a a bの脚韻を持つ弱強4詩脚である。ハイフンや休符が多用されることによって、独特のリズム感が醸し出されている。

この詩の「献辞」第5パラグラフで、シェリーは「地獄や悪魔は超自然的なものと考ええる必要はないということがおわかりになるでしょう」(“You will perceive that it is

not necessary to consider Hell and the Devil as supernatural machinery.”) と述べている。ここで言う「地獄」とは人間社会における日常的な偽善であり、その社会秩序の中でそれを動かしているのが「悪魔」である。その「悪魔」は、外見上は紳士を装っている。

この作品はその全篇が風刺と笑いに満ち溢れているが、本稿では紙面の関係上、主人公が登場する場面のみを取り上げる。まず、第1部冒頭1～20行目を引用する。

And Peter Bell, when he had been
With fresh-imported Hell-fire warmed,
Grew serious – from his dress and mien
'Twas very plainly to be seen
Peter was quite reformed.

His eyes turned up, his mouth turned down;
His accent caught a nasal twang;
He oiled his hair; there might be heard
The grace of God in every word
Which Peter said or sang.

But Peter now grew old, and had
An ill no doctor could unravel;
His torments almost drove him mad; –
Some said it was a fever bad –
Some swore it was the gravel.

His holy friends then came about
And with long preaching and persuasion,
Convinced the patient, that without
The smallest shadow of a doubt
He was predestined to damnation.

そしてピーター・ベル、地獄より仕入れた
業火で身を暖め、
厳粛な様子 – その服装、物腰から
ピーターが回心したことは
あまりにも明白。

まなじりは上がり、口の両端は下がり、
声は鼻声混じり、
髪には油を塗り、ピーターの
話す声、歌う声には
神の恩寵の響き。

しかし、今やピーター、年老いて
どの医者にもわからぬ病に倒れた
あまりの苦痛に気も狂わんばかり－
熱病だと言う者もいれば－
砂尿症に違いないと言う者もいる。

それから聖職者の友人達が来て
長い説教、説得の後、
こう宣言した－この患者は
一点の疑いもなく
地獄に落ちる運命にあると。

地獄の洗礼を受けたピーター＝ワーズワスは、顔つきも声も変わっている。まなじりが上がり口の両端が下がっているとの描写のくだりは、多分にカリカチュア的、漫画的であるが、これはシェリーの風刺詩以外の作品には見られない視覚イメージである。フィリップ・コンネルによれば、ロマン派の時代のイギリスではカリカチュアが大流行していた。⁶ この引用箇所における、およそシェリーらしからぬ詩的イメージも、当時流行したカリカチュアの影響によるものと見ることはできるのではないだろうか。

次に、ワーズワスがカリカチュアライズされている場面を、もう一箇所引用する。第6部においてピーターは「悪魔に寄せるオード」を悪魔に捧げる。これは、道徳的なシェリーから見れば、詩人として最低の行為である。しかし、これに対して、第7部で悪魔はピーターを昇進させる。ここでは、世俗の名誉を重んじるピーターが大喜びする様子が戯画化されている。678～707行目を引用する。

When Peter heard of his promotion
His eyes grew like two stars for bliss:
There was a bow of sleek devotion
Engendering in his back; each motion
Seemed a Lord's shoe to kiss.

He hired a house, bought plate, and made
A genteel drive up to his door,
With sifted gravel neatly laid, –
As if defying all who said
Peter was ever poor.

But a disease soon struck into
The very life and soul of Peter –
He walked about – slept – had the hue
Of health upon his cheeks – and few
Dug better – none a heartier eater.

And yet, a strange and horrid curse
Clung upon Peter, night and day –
Month after month the thing grew worse,
And deadlier than in this my verse
I can find strength to say.

Peter was dull – he was at first
Dull – O, so dull – so very dull!
Whether he talked, wrote, or rehearsed –
Still with this dullness was he cursed –
Dull – beyond all conception – dull. –

ピーターは昇進の知らせを聞き、
目は喜びのあまり二つ星のごとく輝いた。
上体を弓なりに曲げ、へつらわんばかりの
最敬礼。その動作一つ一つが、
主人の靴に口付けせんばかり。

ピーターは家を借り、表札を買った、
玄関口まで洒落た小道をつくり、
小奇麗に砂利を撒いた。 –
彼を貧乏人呼ばわりする者すべての
口を封じんばかりに。

しかし間もなく病が
ピーターの命と魂を奪った。－
彼は歩き回り－眠り－頬は
健康なバラ色－彼ほど働く者は珍しく
－彼ほどたらふく食う者もいなかった。

だが、恐ろしい奇妙な呪いが
昼夜ピーターにとりついた－
月毎に症状は悪化し、
この詩で言い表すことができぬ程に
致命的な状態になった。

ピーターは愚鈍になった－最初は、
愚鈍－ああ、あまりに愚鈍、あまりにあまりに愚鈍。
話しても、書いても、暗唱しても。－
それでも彼はこの愚鈍さに呪われた。－
愚鈍－どう考えても－愚鈍。－

この引用箇所最初の連（ll. 678-682）では、世俗の栄誉の喜びに目を輝かせ、ぺこぺこお辞儀をする俗物根性のピーターが生き生きと、しかも憎々しげに描かれている。また、2番目の連（ll. 683-687）はワーズワスが晩年を過ごしたライダル・マウントの家の外観の様子である。玄関まで通じる小道に洒落込んで玉砂利が敷き詰められた様子が皮肉たっぷりに描写されている。最後の連（ll. 703-707）では“dull”（「愚鈍な」）という語が名詞形“dullness”を含めて7回も繰り返される。これは、詩人・芸術家にとって最も屈辱的な言葉であり批判であるが、詩的才能の枯渇は、サウジー、コールリッジ、ワーズワスの晩年の作品に共通する傾向でもあった。また、自らも詩人であったシェリーにとっても、想像力枯渇の問題は決して他人事ではなかったはずである。

『ピーター・ベル三世』は、シェリーの最もコミカルな風刺詩であり、笑いの要素が大きい作品である。このような詩が書かれた背景として、当時パロディーの詩やカリカチュアの絵が大流行していたこと、風刺詩人バイロンとの交流があったこと、さらにはギリシャ・ローマの風刺詩に接したことが挙げられる。

しかし、この詩もまた、シェリーが本質的には真面目な詩人であることを示す一例であると思われる。何故なら、彼はこの詩において主人公ピーター＝ワーズワスを、そこに多少の誇張はあるにしても、いわば反面教師に仕立て上げることによって逆に詩人のあるべき姿を明確に打ち出しているからである。この作品は、シェリーの風刺が作品全体のメッセージやモラルと不可分の関係にあることを示している。シェリーにあっては、

パロディーさえもが倫理的な問題に直結しているのである。

従って、シェリーはこの詩においてワーズワスの長所は長所として率直に認めている。
例えば、第4部303～322行目においてシェリーはワーズワスの長所と短所の両方に言及している。ワーズワスの長所・魅力を率直に認めている313～317行目を引用する。

Yet his was individual mind,
And new created all he saw
In a new manner, and refined
Those new creations, and combined
Them, by a master-spirit's law, . . .

しかし、彼は独自の精神を持ち
見たものすべてを新しい方法で
新たに創造した。そしてその
新たな創造物を浄化し、そして
名匠の精神の法則に基づいて結びつけたのだ。

この部分は、ワーズワスの風刺ではなく韻文で書かれたワーズワス批評であると言っても過言ではない。シェリーはここで、ちょうどコールリッジが『文学評伝』(*Biographia Literaria*) 第22章でワーズワスの詩の長所と短所の両面を指摘したように、ワーズワスの詩の本質を的確に言い当てているのである。

これに対して、バイロンの風刺は、風刺のための風刺といった性格が強い。彼の場合、風刺は善悪の問題ではない。バイロンは、大変短い詩行の中で鮮やかに相手を笑い飛ばしてやっつけるが、その反面、彼は自分が指摘した欠点を相手に改めることは強要しない。彼の場合、後で前言取り消しも大いにあり得る。このようなバイロンの姿勢は、例えば『ドン・ジュアン』第12歌第40連1～3行目に端的に表われている。⁷

But now I'm going to be immoral; now
I mean to show things really as they are,
Not as they ought to be: . . .

しかし、これからわたしは不道徳になろうと思う。
今わたしは物事を、あらねばならぬ姿ではなく、
事実のままに示すつもりだ。 . . .

ここでバイロンが、自分の立場を「不道徳」と割り切っている点は注目に値する。実

際、バイロンは『イングランドの詩人達とスコットランドの批評家達』 (*English Bards and Scotch Reviewers*) において、たった20行で見事にワーズワスを茶化しているが、後年この発言は不当であるとして自ら取り消している。シェリーの風刺詩においては、前言取り消しなど到底考えられないことである。

(3) 『無秩序の仮面』

『無秩序の仮面』は1819年、マンチェスター虐殺事件のニュースを知ったシェリーが憤激のあまり一気に書き上げ、イングランドにいたリー・ハントのもとに送ったが、ハントは当時の不穏な社会情勢を鑑みて出版を見合わせた。

この詩で最も風刺が効いている部分は、冒頭である。ここでは、「欺瞞」(“Fraud”) = エルドン、「殺人」(“Murder”) = カーススロー、「偽善」(“Hypocrisy”) = シドマス、「無秩序」(“Anarchy”) = (恐らく) 摂政皇太子、が不気味かつ滑稽な姿で、次々に登場する。5～37行目(第2～9連)を引用する。

I met Murder on the way –

He had a mask like Castlereagh –

Very smooth he looked, yet grim;

Seven bloodhounds followed him:

All were fat; and well they might

Be in admirable plight,

For one by one, and two by two,

He tossed them human hearts to chew

Which from his wide cloak he drew.

Next came Fraud, and he had on,

Like Eldon, an ermined gown;

His big tears, for he wept well,

Turned to mill-stones as they fell.

And the little children, who

Round his feet played to and fro,

Thinking every tear a gem,

Had their brains knocked out by them.

Clothed with the Bible, as with light,

And the shadows of the night,
Like Sidmouth, next, Hypocrisy
On a crocodile rode by.

And many more Destructions played
In this ghastly masquerade,
All disguised, even to the eyes,
Like Bishops, lawyers, peers, or spies.

Last came Anarchy: he rode
On a white horse, splashed with blood;
He was pale even to the lips,
Like Death in the Apocalypse.

And he wore a kingly crown,
And in his grasp a sceptre shone;
On his brow this mark I saw –
“I AM GOD, AND KING, AND LAW!”

私は途中で「殺人」に出会った。
彼はカースルローのような仮面をつけていた。
とてもすべすべした顔つきだが、きつい表情だった。
七頭の猟犬が彼についてきた。

みんな太っていた。犬どもが申し分ない
状態にあるのも無理もない。
というのは、一つずつ、あるいは二つずつ、
彼は人間の心臓を体に引き寄せるようにまとった
幅広いマントから取り出して投げ与えていたからだ。

次に「欺瞞」がやって来た。彼はエルドンのような
白テンの法官服を着ていた。
その大粒の涙は、彼はよく泣いたからであるが、
落ちると白石に変わってしまった。

そして、その一粒一粒の涙が

宝石だと思って彼の周りで遊んでいた子供達は、
その白石のために
脳みそを叩き出されてしまった。

影と光をまとうように
聖書を身にまとして、
次に、シドマスのように
「偽善」がワニに乗ってやって来た。

そして、さらに多くの「破壊者ども」が、
この恐るべき仮装舞踏会に加わっていた。
誰もが、司教、法律家、上院議員、スパイのごとく
目元に至るまで完全に仮装していた。

最後に「無秩序」がやって来た。彼は白馬にまたがり、
その周囲には血の斑点が飛び散っていた。
彼は、唇まで蒼ざめていて、
まるで、「黙示録」に出てくる「死の姿」のようだった。

彼は頭上に王冠をいただき、
手には輝く笏を握っていた。
その額には、次のような印が見られた－
「我こそは神であり、王であり、法である！」

カースルローのような仮面をつけた「殺人」という言い方は、比喩のかたちをとっているが、カースルロー＝「殺人」であることは、誰の目にも明らかである。彼が人殺しであるのは、戦争や国内の弾圧政策で大勢の人が血を流しているからである。その追従者（貴族や議員）が「太った犬」であるのは、その飼い主の「殺人」から寵愛や恩恵を受けているからである。犬に人間の心臓を餌として与えているところなど、相当辛らつである。また、ちょうど「人間界を歩く悪魔：バラッド」や『ピーター・ベル三世』で悪魔の外見が紳士であったように、『無秩序の仮面』の「殺人」、「欺瞞」、「偽善」、「無秩序」もまた社会的にもっともらしい外見を備えている。

詩全体は、二部構成をとっている。即ち、前半（21連+15連）は、仮面行列と、「希望」や「姿形」が登場する経過的部分から成る。後半（55連）は、詩人の民衆に対するメッセージが発せられる部分である。ジョーンズによれば、この詩の二部構成はルキリウス、ホラティウス、ユウェナーリス、ペルシウスといった古代ローマの詩人達の風刺

詩の二部構成を踏襲したものである。ローマの風刺詩は、前半では特定の愚行や悪が風刺の対象となり、突然の「転換」(“turn”)の後、後半では、その正反対の美德が称えられるというかたちをとる。また、場合によっては美德の勧めや合理的な行動の仕方が提示される。⁸ シェリーの『無秩序の仮面』は、ローマの風刺詩の二部構成を踏まえながら特に後半の部分で新機軸を打ち出したものと見ることができる。即ち、前半では「無秩序」の仮面行列の愚かさ、馬鹿馬鹿しさが提示され、後半では「自由」を求めるべく、改革に向けてのメッセージが発せられる。シェリーは『ピーター・ベル三世』においてワーズワスやイギリス社会に対して道徳的判断を下したが、『無秩序の仮面』では、さらに一歩進んで民衆に社会改革を呼びかけているのである。そのメッセージは、以下の3点に要約される：

- ① 奴隷根性が専制政治を支える。理想的な社会の実現のためには、上からだけでなく下からの改革が必要である。圧制は、「暴君」と「被支配者の奴隷根性」の両方があるのはじめて成立するものである (ll. 184-187)。
- ② 非暴力的不服従こそが真の力を持つ。思想的にはマハトマ・K・ガンディーの「サティヤーグラハ」(“Satyagraha”)の先駆をなすものである (ll. 344-351)。
- ③ 数は力である。このメッセージは、詩の中で二度繰り返される次の詩行に明らかである：「汝らは多数、彼らは少数 (“Ye are many – they are few.”)」 (l. 155, 372)

『無秩序の仮面』の後半の部分は、ローマの伝統的な風刺詩の範疇を越えている。辛らつで独特のブラックユーモアの漂う前半に対して、この詩の後半におけるシェリーは真剣そのものである。『無秩序の仮面』は、シェリーにあつては風刺さえもが、そこから改革のレトリックが展開していく起点となり得ることを示しているのである。

－未完－

<注>

- 1 スティーヴン・スペンダー著 森清訳『シェリー』(英文学ハンドブック－「作家と作品」No. 16) 研究社 1956, pp. 36-37, 64-65.
- 2 Steven E. Jones, *Shelley's Satire: Violence, Exhortation, and Authority*, Northern Illinois U. P., 1994.
- 3 鈴木善三『イギリス風刺文学の系譜』研究社1996, pp. 3-18. なお、この著書は第7章「ロマンティック・アナトミー」においてブレイク、コールリッジ、バイロン、サウジー、ハズリット、ピーコックを取り上げているが、シェリーには全く言及していない。
- 4 シェリーの作品のテキストには、「人間界を歩く悪魔：バラッド」と『暴君スウェルフット』に関しては *The Complete Works of Percy Bysshe Shelley*, eds. Roger Ingpen & Walter E. Peck. 10 vols. Gordian, 1965、それ以外の作品に関しては *Shelley's Poetry and Prose: Authoritative Texts Criticism*, ed. Donald H. Reiman, W. W. Norton & Co., 1977. を使用した。また、引用箇所日本語訳は、すべて筆者によるものである。

- 5 Graeme Stones & John Strachan (eds.), *Parodies of the Romantic Age*, London: Pickering and Chatto, 1999.
- 6 Philip Connell & Nigel Leask, *Romanticism and Popular Culture in Britain and Ireland*, Cambridge U. P., 2009, p. 152.
- 7 バイロンの作品のテキストには *Byron Poetical Works*, ed. by Frederick Page, revised by John Jump, Oxford U. P., 1970. を使用した。
- 8 *Shelley's Saitire*, pp. 105-106.

本稿は、イギリス・ロマン派学会第36回大会（於 大阪大学豊中キャンパス、平成22年10月10日）における研究発表の原稿に手を加えたものである。

（平成22年10月29日受付、平成22年11月11日受理）

